

「中期」ウィトゲンシュタインにおける『論考』の継承と転換

オーガナイザー 山田圭一(千葉大学)
高木俊一(京都大学、京都哲学研究所)
入江俊夫(東邦大学)
林大悟(玉川大学)

ウィトゲンシュタインの思想はしばしば前期と後期の二つの時期に分けて論じられる。前期の主著としては1922年に刊行された『論理哲学論考』(以下、『論考』と省略)が挙げられ、後期の思想は1936年から10年ほどをかけて書き上げられた『哲学探究』(以下、『探究』と省略)が挙げられることが多い。そして『探究』の前半部では『論考』における自らの思索との批判的な対峙を通じて彼の新たな後期の思想が展開されていることはよく知られているところである。

しかし、この前期と後期の思想にはあいだがあり、従来その思想期は「中期」と呼ばれてきた。だが、どこからどこまでの時期を中期の思想とみなすのかについては、いまだ論者によって見解が一致していると言えない。

まず中期と後期の区分に関しては、一般的には少なくとも1933年に口述を始めた『青色本』以降を後期の思想として区切ることが多いが、もっと前に後期の思想の始まりを見る論者もいる。そして、前期と中期の区分についても、『論考』を執筆後のウィトゲンシュタインがおよそ10年の時を経て1929年の1月に再びケンブリッジに戻ったときを中期の始まりとみなされることが多い。しかし、ウィトゲンシュタインがブラウワーの講演を聞いた1928年3月や、それ以前にウィーン学団と交流し始めた哲学的思索の再開時期を中期の開始とみなす論者もいる。さらに『論考』の枠組みを変更し始めた時期を中期と捉えるならば、中期の開始時期はもっと遅くなる可能性もある。

以上の点を踏まえて、本WSでは「中期思想」のうちで彼の哲学復帰前後から1930年代初頭までの思想に焦点を合わせて、この時期のウィトゲンシュタインが何を考えていたのかについて掘り下げて考えてみたい。そのなかでも特に本WSで問うてみたいのは、前期思想の主著である『論考』との関係である。先にみたように後期のウィトゲンシュタインは『論考』に対する根本的な批判を展開するに至る。では、彼は哲学復帰間もないこの時期に、『論考』をどのように捉えていたのだろうか。最初から『論考』から離れようとしていたのだろうか、それとも、むしろ彼は『論考』を守ろうとしていたのだろうか。

これらの問いに対して、この時期のウィトゲンシュタインの思想を研究する三人の論者がそれぞれの観点から考察を試みる。そのうえで、「中期」のウィトゲンシュタインが何と闘い、どう闘っていたのかについて、フロアのみなさんを含めてあれこれ考えてみたい。

高木の発表では、30年代初頭のウィトゲンシュタインの考察が『論考』の枠組みの放棄ではなく、洗練の試みとして見られるべきことを示す。このために、まず29年10月以後のウィトゲンシュタインの考察が、ラムジーが同年9月までにまとめた一連の草稿群にテーマ的に対応していることを確認

し、特に30年1月以後の『論考』の基本思想群にまつわる考察がラムジーにも影響を与えた因果論的言語の理論的批判的検討の文脈にあることを示す。近年の『論考』の草稿群研究に照らすと、ここで再吟味されていた基本思想群は、1915年春以後ラッセルの科学的方法に応答する形で定式化されていたことが示されるが、その背景に照らすと、30年代初頭の考察は『論考』の再吟味は、言語と実在の内的関係、哲学が自然科学と異なり何らの「発見」ももたらすものではないという『論考』の基本的着想を、因果論的言語観に見られるような科学的哲学観に対して擁護していたことが明らかとなる。

入江の発表では、ウィトゲンシュタインが哲学に復帰後1、2年までの、無限領域上を走る変項を持つ一般命題の扱いに着目する。無限というトピックは、彼が哲学に復帰した1929年に最も精力的に取り組んだものの一つであり、同年7月のアリストテレス協会とマインド協会との合同学会で、当初予定されていた「論理形式について」を変更して、数学における無限について話をしたことはよく知られている。また、当時無限について綴られた多くの手稿のなかには、無限の連言や選言を斥けるという趣旨の「私の理論は、無限な命題は存在しない、ということにおいて頂点に達することになる」

(MS 106: 184. 強調は原著者による)という所見も見られる。ただし、この見解がどの程度『論考』で準備されていたのか、あるいは反対に、『論考』に無限の連言や選言に対するコミットが見られるのかを検討する必要がある。発表では、この点を検討しつつ、この時期の無限領域上を走る変項を持つ一般命題の扱いの性格を、同時期の数学的帰納法についての多数の所見や、「検証主義的な意味論」の内実を扱うことにより、『論考』から踏み出した「一歩」として明らかにする。

林の発表では、『論考』における「要素命題の相互独立性」の主張を中期ウィトゲンシュタインが放棄するに至った理由とその意味を、「論理空間」に基づいて明らかにすることを試みる。「論理形式について」(1929年)に定位した解釈では、「色排除問題」という些細な問題による『論考』の解体の始まりといったイメージでしばしば捉えられてきた。これに対して、本発表が注目するのは、1930年のウィトゲンシュタインのテキストである。そこでは、「色排除問題」とは異なる理由、色空間(論理空間)が要素命題の相互独立性の放棄の直接的な理由として言及されるようになる(『哲学的考察』§ 83, TS209, 1930, cf. MS108, 1930.1.1)。論理空間は現実と命題の接点を保証し、要素命題や要素命題の真理関数を可能とする『論考』の根本思想であるが、要素命題の相互独立性の放棄、要素命題の内部構造に関わる論理空間における座標の規定などの思想の変化を、『論考』の論理空間一般に関する再認識に由来するものと解釈する。この意味で、中期ウィトゲンシュタインの思想は、『論考』の解体や、『論考』からの訣別ではなく、『論考』の思想の明晰化という地平のうちに位置付けられるだろう。